

訪問看護師の「特別な経験」を言葉にする
－ 在宅チームにおけるナラティブ・リサーチから －

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会臨床クラスター
村上 成美

本研究の目的は、筆者が在宅看護に関わる中経験を重ね、在宅看護の魅力であると感じている、直接明示することが困難な「特別な経験」について、できる限り多面的に検討し、それがどのようなものであるかについて「ひとつの物語」を構成し提示することである。

本研究は、筆者が訪問看護師として関わる中で「特別な経験」を感じることができた悪性腫瘍終末期の在宅緩和ケアの1事例を対象にした。筆者自身による詳細な自己記述および、患者の妻、事例に携わった看護師2名、介護支援専門員1名に行った非構造化面接の逐語録をナラティブ・データとして用いた。複数の視点からの語りを並置することにより、在宅医療において行われている実践を重層的に描き出し、それらの語りをすりあわせ総合した。その結果、日頃思考することなく行っている実践を明示することができた。そして、本研究の主題である「特別な経験」とは、各々の背景や状況により表現の仕方は違っているものの「ケアを届けたつもりが、成長や贈り物（ギフト）を受け取る何のものにも替えがたい相互的な経験」として言語化されるものであると結論づけられた。

本研究の成果は、訪問看護師のみならず在宅を支える多職種が在宅ケアの魅力や意味づけを得るきっかけとなると思われる。